

処方番号：191A      処方名：奔豚湯（肘後）（ほんとうとう・ちゅうご）

**処方構成：**

甘草 2、人参 2、桂枝 4、呉茱萸 2、生姜 1、半夏 4

**用法・用量：**

湯

**しぼり：**

体力中等度以下から虚弱で、下腹部から動悸が胸やのどに突き上げる感じがするものの次の諸症

**効能・効果：**

発作性の動悸、不安神経症

**原典：**肘後方

**出典：**

**解説：**

本方の構成は桂枝甘草湯と呉茱萸湯を組み合わせたものに類似している。すなわち、気逆（気の衝逆）と脾胃の寒飲が併存する病態が適応となる。本方の名の由来である「奔豚気」とは発作的に不安感・焦燥感に襲われ、不快な違和感（球のようなもの）が腹部から胸内に上向し、動悸・頭痛などを生じる病態である。寺澤捷年らは本方が奏効した多数の症例を報告している（日本東洋医学雑誌 38 巻 1987）。

奔豚湯（金匱）（191）との鑑別は熱感を伴い、より実証のものには金匱要略の奔豚湯を、虚証で熱感がなく、胃腸虚弱のものには肘後方・奔豚湯を用いると良い。

191A.奔豚湯(肘後)

参考文献名	甘草	人参	桂枝	呉茱萸	乾生姜	半夏	用法・用量
現代漢方入門	2	2	4	2	1	4	
1000万人の漢方診断と治療の実際	2	2	4	2	1	4	

注1

・不安神経症、ヒステリー、血の道症。

処方番号：192            処方名：麻黄附子細辛湯（まおうぶしさいしんとう）

**処方構成：**

麻黄 2-4.8、細辛 2-4.8、加工ブシ 0.3-1

**用法・用量：**

湯

**しぼり：**

比較的体力虚弱な人、あるいは高齢者で手足に冷えがあり、ときに悪寒するものの次の諸症

**効能・効果：**

感冒、アレルギー性鼻炎、気管支炎、喘息、神経痛

**原典：傷寒論**

**出典：**

**解説：**

本方は陰証で発症する気道感染症に用いられる方剤である。原典である『傷寒論』には「少陰病、始め之を得て、反って発熱し、脈沈の者は、麻黄附子細辛湯之を主る」と記されている。すなわち感冒やインフルエンザでは通常、悪寒が先行し、次いで発熱が現れるが、本方が適応となるような陰証の患者では、悪寒が持続し、蒼白な顔色で、熱感を感じない。咽喉の痛みを伴うことが多い。

『EBM漢方』には、本方の感冒改善効果について、総合感冒薬とのランダム化比較試験（本間行彦ら）が記されており、感冒の改善には本方が有意に優れていることが明らかにされている。

本方は上述のように陰証の感冒の初期に用いられるが、この他に「アレルギー性鼻炎」にも応用される。この場合にも陰証の所見が目標となる。『EBM漢方』には鼻アレルギーの多施設症例集積研究（伊藤博隆ら）が記されており、全般改善度 54.7%とその有用性が示されている。

192.麻黄附子細辛湯

参考文献名	麻黄	細辛	附子	炮附子	白川附子	用法・用量
漢方診療医典 注1	4	3	0.5~1			
漢方処方応用の実際 注2	4	3	0.5			
症候による漢方処方の実際 注3	4	3	0.6			
漢方と民間薬百科 注4	4	3	1			
漢方治療百話第一集 注5	4	3			0.5 ~1	
漢方処方分量集	4	3	1			
改訂新版漢方処方集 注6	2	2		0.3		*1
漢方入門講座 注7	3	2	1			
漢方薬入門 注8	4	3	1			
漢方医学の基礎と診療 注9	2	2		3		
現代漢方入門 注10	4	3	1			
漢方精撰百八方 注11	4	3	0.5~1			

\*1 水400を以って麻黄を煮て320に煮つめ上沫を去り他の諸薬を入れて煮直して120に煮つめ3回に分服。

注1

・本方は小陰病で発病初期、表症のあるものに用いる。そこで虚弱者や老人などの感冒、気管支炎、気管支喘息などに用いられる。

・本方の目的は悪寒、微熱、脈沈細、全身倦怠、無気力、嗜臥などである。これに対して本方を用いると、悪寒が去り、気力は回復し、諸症軽快する。また虚弱者の咳嗽で、時に背部に悪寒を覚え、希薄な水様の喀痰を吐き、尿も希薄で量が多く、脈沈細、貧血性、無気力の者にも、本方はよく奏効する。

注2

・身体が虚弱で、悪寒ばかりで熱意がなく、微熱、倦怠、無気力、脈が沈細で力がないなどの症状があり、身体や手足が痛む。蒼白な顔をして寒そうにし、元気がなくて横臥している。手足が冷え、咳、咽痛、頭部冷痛などを訴える。

・虚弱者や老人の感冒、流感、気管支炎、肺炎などのほか、気管支喘息、蓄膿症、三叉神経痛、歯痛などで脈が沈んで冷え性のもの。

注3

・頭が冷えて痛むものによい。

・小青竜湯を用いるような患者で、脈沈のものに用いる。発熱がある場合でも、脈が浮とならず沈んで小さい、老人の気管支炎などのこの証がある。

・小青竜湯を用いるような患者で、喘息で気力がなく、脈が弱く沈んで小さく、寒がるものによい。

注4

・寒気がして熱があるが、脈は沈んで細く、気力なく、起きる力がなく、ただ寝るのを好む。せきが出ることもあり、薄いたんが出ることもある。

・老人や虚弱者の感冒、気管支炎、ぜんそく、頭痛。この処方を用いる頭痛は、頭巾などをかぶっていると気持ちがよく、冷えると気持ちが悪くという傾向のもの。三叉神経痛。

注5

・これは小陰上といって、体力の弱い人に用いられる。すなわち平常虚弱の人や老人の気力の萎えた人などで、いかにも陰気な状態で、悪寒があつて布団を被り、熱もそれほど高くならず、全身倦怠感がはなはだしく、無気力で横臥することを好み、顔色も蒼い方である。脈は沈んで細くて弱いものである。気管に症状が現われ咳嗽が出て、背中が寒く、希薄な痰が出ることがある。無気力性肺炎型によく現われる。

注6

・発熱するも悪寒多く、或は悪寒だけで頭痛身疼、或は喘或は鼻つまるもの、脈沈。

・感冒肺炎などの急性熱病、喘息、蓄膿症。

#### 注7

- ・感冒：体温計で高熱を示しても自覚的にはあまり熱感がない。赤い顔もしない。大体が冷え性で熱があるから頭を冷やそうとすれば反って気持ちが悪く、むしろ布や頭巾を頭にかぶっている方が気持ちがいい。頭痛はするが肩項はこらない。老人や虚虚体質の人にはよく見受けられる。
- ・蓄膿症：鼻汁はうすく或は反対にただ鼻がつまるだけで分泌が殆どない虚弱質に使う。これは虚寒証で貧血性、脈は沈である。
- ・発熱悪寒脈沈のものを治す。
- ・虚弱者、老人などの感冒、蓄膿症、喘息

#### 注8

- ・微熱、悪寒、虚弱体質、無気力、直ぐ横になりたがる、咳嗽。
- ・老人感冒、無力性肺炎、気管支炎、流感。
- ・感冒（風邪）：麻黄湯の証に似て脈が沈細で、頭痛発熱があるが頭が冷たく氷でひやすのを嫌う人には麻黄附子細辛湯。
- ・低血圧症：一般に虚弱体質の人に多く、頭痛、めまい、手足の冷えなどを訴える人には麻黄附子細辛湯。
- ・神経痛：三叉神経痛や後頭神経痛で、頭が冷たく帽子や頭巾をかぶるのを好む人で、血色がすぐれず脈沈細のときには麻黄附子細辛湯。
- ・麦粒腫：冷え性の人には麻黄附子細辛湯。

#### 注9

- ・老人の感冒薬。
- ・本方は虚弱な人や老人の感冒に用いる。すなわち熱が出ても低く、寒気が伴わず、あるいは寒気だけで熱がなく、頭痛とからだの痛みを訴え、咳と痰と息切れと鼻水になやまされ、気力はなくなり、疲労倦怠感のある人による。また本方は老人の喘息にも応用される。
- ・感冒、肺炎、喘息、蓄膿症。

#### 注10

- ・何も派手なところがなく、寒気がするぐらいで、ただなんとなく元気がなく、ごろごろしているようなのは陰証のカゼであり、この場合には、麻黄附子細辛湯のような薬方が使われる。
- ・流感、気管支炎、肺炎。

#### 注11

- ・少陰病というのは脈微細、ただ寝ていたいという症状のもので、生活反応の活発でない状態で、急性の時期から慢性期に移行する病態の症状で、老年期に入るとカゼの症状がいきなりこの少陰病になってしまう場合が少なくない。本方はこの少陰病で発熱して脈沈の者に適する。
- ・老人のカゼの症状で発熱し咳をするものに用いる。

処方番号：193

処方名：麻黄湯（まおうとう）

**処方構成：**

麻黄 4-5、桂枝 3-4、杏仁 4-5、甘草 1.5-2

**用法・用量：**

湯

**しぼり：**

体力充実して、かぜのひきはじめて、さむけがして発熱、頭痛があり、せきが出て身体のふしぶしが痛く汗が出ていないものの次の諸症

**効能・効果：**

感冒、鼻かぜ、気管支炎、鼻づまり

（使用上の注意：身体虚弱の人は使用しないこと。）

**原典：傷寒論**

**出典：**

**解説：**

太陽病の表熱実証の漢方である。平素丈夫で頑健な体質の者で体力充実したものに用いる。症状としては実証であるから、激しい症状を呈するもので、発熱、悪寒も激しく、頭痛も激しく、咳も激しい、激しい身体疼痛等を伴う。これらの症状は表位にある水毒に起因するものであり、したがって麻黄湯は表にある水滯を解く薬方である。なお本方は桂枝湯とは異なり、無汗であり汗が自然に出るようなことはない点葛根湯と同様の状態である。またこの麻黄湯証にさらに表の水毒証がやや慢性化して尿利減少、浮腫があらわれると本方に朮5を加えた麻黄加朮湯を用いる。

『方函類聚』に「傷寒無汗喘、又喘家風寒に感じて発する者を治す」とあり、また「麻黄湯(千金)麻黄、独活、射干、桂枝、甘草、木香、石膏、黄芩。以上八味、治小兒丹腫及風毒風疹、風疹、麻疹、熱甚しく発泄しがたき者に効あり、麻疹咽痛に別して宜し、小兒丹毒には柴圓を兼用すべし」ともある。

### 193.麻黄湯

参考文献名	麻黄	杏仁	桂枝	甘草	用法・用量
処方分量集	5	5	4	1.5	
診療の実際	5	5	4	1.5	
診療医典 注1	5	5	4	1.5	
症候別治療	5	5	4	1.5	
処方解説 注2	5	5	4	1.5	*1
応用の実際	5	5	4	1.5	
明解処方	5	5	4	1.5	
漢方処方集	3	4	2	1	*2
基礎と診療	3	4	2	1	
診かた治しかた	4	4	4	1	
実用漢方療法	5	5	4	1.5	
漢方入門	4	4	2	1	*3

\*1 水600ccをもってまず麻黄を煮て500ccとし、上沫を去り、他薬を入れて再び煮て250ccとし滓を去り、3回にわけて温服する。

\*2 水360ccを以て麻黄を煮て260ccに煮つめ上沫を去り他の諸薬を入れて100ccに煮つめ3回に分服

\*3 麻黄:麻黄の節を去ったものなら3

【注1】 目標は悪寒、発熱、脈浮緊で、汗なく、発熱に伴う諸関節痛、腰痛、喘咳などの症候のあるものである。このような症状は感冒や流行性感冒その他の熱性病の発病初期にみられるものである。本方は発汗と利尿の効があり、これを服用して発汗して諸症の軽快するものと、尿量が増加してよくなる場合とがある。

【注2】 熱性病のときは頭痛、身疼痛、腰痛、関節痛、悪風などがあるが、汗が出ないというのを第一目標とする。熱のないときでも脈が浮緊である。喘や飢などがある。

勿誤方函口訣には、「此方ハ太陽傷寒無汗ノ症ニ用フ、桂麻ノ弁、仲景氏巖然タル規則アリ、犯スベカラズ、又喘家風寒ニ感ジテ発スル者、此方ヲ用フレバ速力ニ愈ユ。朝川善庵終身此一方ニテ喘息ヲ防グト云フ」とある。また、古方薬囊には、「発熱頭痛、首すじ肩背中腰など痛、息はやく、咳出て或は鼻塞りて通ぜず、或は咽喉痛み、或はぜえぜえと喘し、さむけありて汗の出ざる者、気力少く、脈沈なるものには用うべからず。熱はあるなしにかかわらず、汗無きが本方の要なり」とある。

処方番号：194

処方名：麻杏甘石湯（まきょうかんせきとう）

処方構成：

麻黄 4、杏仁 4、甘草 2、石膏 10

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度あるいはそれ以上で、せきが出て、ときにのどが渇くものの次の諸症

効能・効果：

せき、小児ぜんそく、気管支ぜんそく、気管支炎、感冒、痔の痛み

原典：傷寒論

出典：

解説：

本方は麻黄湯の桂枝の代りに石膏を加えたものである。桂枝は体表（表）の熱を去るのに対し、石膏は体内（裏）の熱をさます効がある。この石膏は麻黄、杏仁と協力して熱を解し、鎮痛の効があり喘咳、自汗を治す。麻黄、杏仁は血行を盛んにして水分の停滞を疎通し喘咳を治す。本方は甘味があって服用しやすいので小児に用いる場合が多い。本方に桑白皮を加えたものが五虎湯で咳、喘咳、息切れによいことがある。



### 194.麻杏甘石湯

参考文献名	麻黄	杏仁	甘草	石膏
処方分量集	4	4	2	10
診療医典 注1	4	4	2	10
応用の実際 注2	4	4	2	10
応用処方解説	4	4	2	10
治療の実際	4	4	2	10
漢方あれこれ	4	4	2	10
後世要方解説	記載なし			
漢方診療の実際	4	4	2	10

〔注1〕 気管支喘息、喘息性気管支炎、百日咳に用い、痔核の疼痛に用いて奇効を奏す。また乳幼児の感冒によく用いられる。

〔注2〕 喘咳が強く、口渴があり、あるいは自然に発汗し、熱感を訴えるもの。(高熱も悪寒もない。) 気管支炎や気管支喘息などに用いられ、ことに小児の喘息や喘息性気管支炎、感冒、肺炎、百日咳に用いられるほか、痔の痛むものや睾丸炎に効がある。

処方番号：194A      処方名：五虎湯（ごこう）

**処方構成：**

麻黄 4、杏仁 4、甘草 2、石膏 10、桑白皮 2-3

**用法・用量：**

湯

**しぼり：**

体力中等度あるいはそれ以上で、せきが強くでるものの次の諸症

**効能・効果：**

せき、気管支ぜんそく、気管支炎、小児ぜんそく、感冒、痔の痛み

原典：万病回春

出典：

**解説：**

麻杏甘石湯に桑白皮が加わったものである。悪寒発熱はなく、汗ばみ、口がかわく状態でのせきに用いられる。原方では細茶が処方され、生姜と葱の白根を入れて煎じ、熱い煎出液を服用することになっているが、一般にはこれらを入れなくてよい。

194A.五虎湯

参考文献名		麻黄	杏仁	甘草	石膏	桑白皮	細茶	生姜	葱白
万病回春 卷上喘急	注1	3銭	3銭	1銭	5銭	1銭	1撮	3片	3根
診療医典	注2	4	4	2	10	3			
症候別治療		4	4	2	10	3			
処方分量集		4	4	2	10	1			
漢方薬局製剤194方の使い方		4	4	2	10	3			
症例から学ぶ和漢診療学		○	○	○	○	○			
漢方診療三十年		4	4	2	10	3			
漢方保険診療の実際		4	4	2	10	3			

〔注1〕 治傷寒喘急，有痰加二陳湯，右剉一劑，生姜三片，葱白三根，煎熱服，後用小青竜湯，加杏仁。

〔注2〕 原方には細茶があるが，一般には入れない。気管支炎：麻杏甘石湯に桑白皮を加えると五虎湯とよばれ，後世方でよく用いられた。本方を持ちいる患者には，肥満して，一見健康そうにみえ，よく水を好んでのむ者がある。

処方番号：195

処方名：麻杏薏甘湯（まきょうよくかんとう）

処方構成：

麻黄 4、杏仁 3、薏苡仁 10、甘草 2

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度なものの次の諸症

効能・効果：

関節痛、神経痛、筋肉痛、いぼ、手足のあれ

原典：金匱要略

出典：

解説：

本方は麻杏甘石湯の石膏の代替に薏苡仁を加えたものである。薏苡仁には筋肉の緊張を解き、水毒の停滞を疎通して鎮痛の効があり、また麻黄、杏仁と伍して筋肉や関節の痛みを駆逐する。甘草はこれに協力してその効を強化する。

195.麻杏薏甘湯

参考文献名	麻黄	杏仁	薏苡仁	甘草
処方分量集	4	3	10	2
診療医典 注1	4	3	10	2
応用処方解説 注2	4	3	10	2
応用の実際	4	3	10	2
治療の実際	4	3	10	2
明解処方	4	3	10	2
漢方あれこれ	記載なし			

〔注1〕 本方は筋肉リウマチ、関節リウマチ、疣贅、汗疱、進行性指掌角皮症などに用いる。

〔注2〕 筋肉リウマチ、関節リウマチ、神経痛、イボ、手掌角化症、水虫などのほか麻痺、湿疹や喘息に用いられる。

処方番号：196

処方名：麻子仁丸（ましにんがん）

処方構成：

麻子仁 4-5、芍薬 2、枳実 2、厚朴 2、大黄 3.5-4、杏仁 2-2.5 （甘草 1.5 を加えても可）

用法・用量：

（1）散：1回 2-3g 1日 1-3回

（2）湯

しぼり：

体力中等度あるいはそれ以下で、ときに便が硬く塊状なものの次の諸症

効能・効果：

便秘、便秘に伴う頭重・のぼせ・肌あれ・ふきでもの・食欲不振（食欲減退）・腹部膨満・腸内異常醗酵・痔の緩和

原典：傷寒論

出典：

解説：

本方は、小承気湯に麻子仁、杏仁、芍薬を加えたものである。

麻子仁は殻を去る。おのおの末となし、蜂蜜で丸とし（1丸の重さ0.1グラムくらいとす）、1回2-3g（20-30丸）を頓服する。あるいは2-3回用い、通便あるを度とする。

## 196.麻子仁丸

参考文献名		麻子仁	芍薬	枳実	厚朴	大黄	杏仁
処方解説	注1	4	2	2	2	3.5	2.5
処方集	注2	4	2	2	2.5	4	2.5
診療医典	注3	5	2	2	2	4	2
治療の実際	注4	5	2	2	2	4	2
応用の実際	注5	5	2	2	2	4	2
診療の実際	注6	5	2	2	2	4	2
民間薬百科	注7	5	2	2	2	4	2
明解処方	注8	5	2	2	2	4(17)	2
処方分量集		5	2	2	2	4	2

〔注1〕 胃腸に熱があって、水分欠乏し、大便乾燥して硬く、塊状をなし、尿頻数のものによい。虚寒の便秘に大黃芒硝剤を用いると腹痛強く、水様下痢を起し不快となる。これには人參、附子等の温剤が必要である。この方はその中間に位するものである。

老人や虚証の人、津液少なく、血燥き、胃腸に熱ある常習便秘に用いる。本方は主として常習性便秘に用いられるが、また尿意頻数・夜尿・萎縮腎の便秘・痔核等にも応用される。

〔注2〕 大便硬きもの、常習便秘

〔注3〕 本方は緩和な下剤で、常習便秘のもの、ことに老人、病後の人などで、体液が枯渇して皮膚や粘膜に滋潤の不足して便秘するものによい、尿量が多くて、大便が硬いというのは、本方を用いる目標である。

〔注4〕 老人、体力のあまり頑丈でない人、大病後の人等で、尿の回数が多くて量も多く、便秘するものに用いる。作用が緩和でひどく下痢しないで通ずるので、常習便秘の人に長期にわたって用いるのに適する。

〔注5〕 老人や虚弱者の便秘に用いる。体液が少なく、胃腸内の水分が欠乏し、大便が乾燥して硬く、塊状をなし、尿利が近く頻数のものである。

〔注6〕 本方は緩和な下剤で、常習性便秘の者、老人で体力の衰えたもの、病後等に便秘するものに用いる。また尿量が多くて、大便が硬いというのは本方の目標である。

〔注7〕 尿の出はよいが、大便が硬くて快通しないものを目標とし、常習便秘、痔核(いぼ痔)、強い下剤では腹が痛んで下りすぎるもの等に応用される。

〔注8〕 常習便秘、多尿、他に苦情なし、等を必須目標にまた皮膚乾燥・老人で体力衰えているもの等を確認目標とする。なお本方は麻子仁の潤腸作用と、小承気湯の緩下作用を合したもので、弛緩性便秘に用いる。多尿の結果、腸管の水分不足して便秘するものを目標にする。

老人または病後衰弱による弛緩性便秘に応用される。

処方番号：197

処方名：木防已湯（もくぼういとう）

処方構成：

防已 2.4-4、石膏 6.4-12、桂枝 1.6-4、人参 2-4

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度あるいはそれ以上で、みぞおちがつかえ、血色すぐれないものの次の諸症

効能・効果：

動悸、息切れ、喘息、浮腫（むくみ）

原典：金匱要略

出典：

解説：

出典である『金匱要略』には「隔間の支飲にして、喘満し、心下痞堅、面色レイ黒（れいこく）、其の脈沈緊」と記されている。隔間の支飲とは胸郭内に水滯があること。面色レイ黒とは煤煙でススけたような黒い顔色のことである。陽証で実証の利水剤である。

その応用範囲は広く『漢方概論』には、腎炎、ネフローゼ、妊娠腎、心臓弁膜症、心筋炎、心不全、心臓喘息、動悸、浮腫などが記されており、臨床上参考となる記述である。本方は陽証・実証の方剤であるが、陽証で虚証のものには茯苓杏仁甘草湯、陰証で虚証のものには真武湯などを用いると良い。



197.木防已湯

参考文献名		木 防 已	防 已	石 膏	桂 枝	人 参	茯 苓	用法・用量
漢方診療医典	注1	4		10	3	3		
漢方処方応用の実際	注2	4		10	2	2		
臨床応用漢方処方解説	注3	4		10	3	3	(4)	*1
金匱要略入門		3		12	2	4		*2
新版漢方医学	注4	4		10	3	3		
諸侯による漢方治療の実際	注5	4		10	2	2		
漢方と民間薬百科	注6	4		10	3	3		
漢方治療百話第1集		4		10	3	3		*3
漢方治療百話第3集		4		10	3	3		
経験漢方処方分量集		4		10	3	3		
改訂新版漢方処方集	注7	3		12	2	4		*4
漢方入門講座・(1)	注8	3		12	2	4		
漢方入門講座・上	注9	3		10	2	4		
新撰類聚方	注10	3		12	2	4		*5
漢方薬入門	注11		4	10	3	3		
漢方医学の基礎と診療	注12	3		12	2	4		
現代漢方入門	注13	4		10	3	3		
漢方古方要方解説	注14	2.4		6.4	1.6	3.2		*6
新古方薬囊下巻	注15	3		10	2	4		*7
漢方精撰百八方	注16	4		10	4	3		
成人病の漢方療法	注17	4		10	3	3		
漢方の診かた治しかた	注18	4		10	3	3		
1000万人の漢方診断と治療の実際	注19	4		10	3	3		
実用漢方療法		4		10	3	3		

\*1 浮腫もあるときは多く茯苓4を加える。

\*2 以上四味、水600錠を以て似て200錠となし、100錠を三回温服せよ。

\*3 右一日量、水五〇〇錠を以て似て三〇〇錠とし、三回に分ち、食前一時間に温服する。

\*4 水二四〇を以て煮て八〇に煮つめ二回に分服。

\*5 右四味、以水六升、煮取二升、分温再服。

\*6 右四味を一包と為し、水一合八勺を以て、煮て六勺を取り、滓を去りて一回に温服す(通常一日二、三回)。

\*7 右四味を水一合二勺を以て四勺に煮つめ滓を去り二回に分け温服すべし。

注1

・本方は腹症状では、心下痞堅があり、呼吸促迫、喘鳴、浮腫などがあって、血色すぐれず。利尿減少のあるものを目標とする。このような症状は、心臓弁膜症で代謝機能の障害せられた時にみられ、肝肥大や肺水腫の徴候がみられることもある。症状のはげしいときは横臥できないものもある。脈は沈緊ということになっているけれども、必ずしもこれに拘泥しなくてよい。

・本方は心臓、腎臓の疾患で以上の徴候があるものに用い、また喘息に用いることもある。

注2

・呼吸促迫して咳も出る。息苦しくて横臥できず、浮腫があるものに用いる。胸はつまって苦しく、少しからだを動かすと息切れしてつらくなり、喘咳があり、心下部が痞えて硬く、顔色は貧血症で薄黒く、脈は沈緊である。腹部は上腹部全体が固く板を張ったようになる。のどがかわき、利尿が減少し、夜になると尿意がおこる。

・本方は脈が弱く、全身がひどく虚しているものには用いられない。また上腹部がそれほど固くなく、何となく息ぐるしい程度のものに用いてもよいことがある。また肺水腫やうっ血による肝臓肥大などがみられる。

注3

・心下部痞えて堅く、心機能不全の徴候を現わし、呼吸困難、浮腫、尿不利などあるものに用いる。本方は主として心臓弁膜症、心不全、心臓喘息、狭心症様症状、原因不明の下肢浮腫等に用いられ、また腎炎、ネフローゼ、妊娠腎、脚気、気管支喘息などに応用される。

・心下部が痞えて堅く(心臓弁膜症に起こる鬱血肝を意味する場合が多い)、顔面は蒼黒く、喘息、動悸、呼吸促迫、腹満があるものを目標とする。また激しいときは横臥不能となり、踞座姿勢をとり、浮腫や利尿減少の症状が現われる。脈は多くは沈緊で、しばしば口渴を訴える。脈が浮弱で結滞するもの、身体が甚だしく衰弱したのものには用いられない。心下部がそれほど堅くなくとも胸苦しいというものに用いてよいこともある。

注4

・心臓弁膜症：心不全の徴候のあるときに、しばしば用いられるもので、心下痞堅（肝の肥大を証明することがある）、チアノーゼ、浮腫、喘咳、呼吸促進、利尿減少のあるものを目標とする。病状が進行している場合には、これにジギタリス葉末0.1gを1日量として兼用するとよい。

・腎炎・ネフローゼ：慢性腎炎で、浮腫、呼吸促進、心肥大、鬱血肝などがみられ、喘咳、心下痞堅のものに用いる。

注5

・胸がつまったようで喘咳があり、みずおちがつかえて堅く、顔色はつやがなくて黄色を帯びた貧血様の黒さを呈し、脈が沈緊であるという症状が数10日もつづき、医師は之に吐剤を用いて吐かしたり、下剤で下したりしても治らないものは木防已湯の主治である。

注6

・動悸・息切れ：動くと、動悸、息切れがひどくなり、浮腫もあり、血色が悪く、腹をみると、みずおちから脇腹にかけて一帯に板のように硬くなっているようなものに用いる。肝臓が肥大していることもある。また、たんがからまるような、せきをすることもある。尿の出は少ない。心臓弁膜症によく用いられる。

・腎炎・ネフローゼ：腎炎・ネフローゼともに末期の状態で、心不全の徴候があつて、浮腫、喘鳴、呼吸困難を訴え、くちびるにはチアノーゼが見られ、みずおちが硬く板のようにはっているものに用いられるが、一時の小康を得ることはあつても、全治は望めない。

・動悸息切れがあつて、みずおちあたりが板のように硬く、のどがゼイゼイといったり、浮腫があつたりするもの。尿の出が少なく、血色もすぐれないもの。

・心臓弁膜症、心臓ぜんそく、腎炎。

注7

・喘満、心下部つかえ堅く面色黒味を帯び小便不利、脈沈緊のもの。

・浮腫、心臓不全、腎臓病。

注8

・心下部の自覚覚低緊張が最も強く、心下痞堅と表現されている位である。その他脈沈緊、喘、顔色が黒い等の特徴的な症状がある。浮腫の程度も最も著しい。

注9

・喘、浮腫。

注10

・腎炎、ネフローゼ、妊娠腎、心臓弁膜症、心筋変性、動脈硬化症、脚気等に於て呼吸困難咳動悸浮腫小便不利心下堅満腹口渴顔色黒ずみ脈沈緊等の症状があるもの。

・アジソン氏病、黒皮症

注11

・胃部つかえて硬い、下半身に浮腫、尿量減少、呼吸促進、舌乾燥し口渴あり、喘咳。

・心臓性喘息、心臓弁膜症、ネフローゼ、脚気、腎炎。

・腎炎・ネフローゼ：慢性腎炎やネフローゼで、心不全の徴候があり、呼吸促進、心臓肥大、喘鳴などがあつて心下部がつかえて硬く抵抗感があり、利尿減少しているときには木防已湯。

注12

・心臓病や腎臓病で、胃部が痞えて硬くなり、顔色がどす黒くなり、咳が出たり呼吸困難を起し、はげしい時には横に寝ることもできず、小便の出方が悪くて浮腫を起した人に使う。

・浮腫、心臓不全、腎臓病、脚気。

注13

・心臓弁膜症、心臓ぜんそく、慢性腎炎、浮腫、カッケ。

注14

・心臓瓣膜病等、心臓瓣膜病に因る代償機障碍（証に由り、茯苓四、〇を加ふ）、水腫性諸疾患、脚気等、心臓性ぜんそく及び其類証、気管支喘息には、証に由り桑白皮、蘇子、生薑を加味す。

注15

・胸腹の間に水溜り居りて息苦しく心下つかえて堅く顔色青黒してゼイゼイとする者、或は顔にむくみ有る者もあり。

注16

・間隔支飲であるから心下部が張ってぜいぜいする、他覚的には胸骨下で上腹部を圧すると痞(つかえる)堅(かたい)していて、面色黧黒(れいこく)黒ずんでいて、脈は沈んで緊張しているような体質(証)のもので、病症そのものは慢性または亜急性のものに適する。要するに本方は水毒を駆うもので、皮下水腫及び組織間浮腫を治すものである。

・身体稀に下半身に浮腫のあるもので、上腹部に抵抗を触れるものに用いる。

注17

・弁膜症で代謝機能の障害があつて、肝臓が腫れて上腹部が板のように堅く重苦しくなり、顔面や唇が暗紫色を呈し、喘鳴を伴う呼吸困難、浮腫、口渴、尿量の減少などのあるものに用いる。

注18

・顔面蒼く、あるいはチアノーゼを呈し、喘咳、呼吸促進があり、心下部がつかえて硬く、尿量減少して、浮腫の症状を呈するものを目標とする。激しい時は横臥することができない。脈は沈緊で、しばしば口渴を訴える。

・心臓弁膜症、心臓性喘息、慢性腎炎、浮腫、脚気。

注19

・弁膜症で代謝機能の障害があつて、肝臓が腫れて上腹部が板のように硬く重苦しくなり、顔面や唇が暗紫を呈し、喘鳴を伴う呼吸困難、浮腫、口渴、尿量の減少などのあるものに用いる。

・慢性腎炎、ネフローゼのとき、心不全の兆候があつて、浮腫、喘鳴、呼吸困難などを訴え、尿量の減少するものに用いる。商陸を加えて用いるとよい。顔面や口唇にチアノーゼがみられ、腹診すると上腹部が板のように硬く抵抗感がある。

・心臓弁膜症、心臓性喘息、慢性腎炎、浮腫、脚気

処方番号：198

処方名：楊柏散（ようはくさん）

**処方構成：**

楊梅皮 2、黄柏 2、犬山椒 1

**用法・用量：**

外用である。細末を混和し、うすい酢又は水で泥状として患部に塗る。

**しばり：**

（しばりなし）

**効能・効果：**

捻挫、打撲

原典：勿誤薬室方函

出典：

**解説：**

『勿誤薬室方函』の下巻（丸・散・膏・丹）の散の部に「家方」として、「跌撲損傷を治す」と記されている湿布薬である。構成生薬の楊梅皮・黄柏・犬山椒は、それぞれ民間薬として、打撲の湿布に使われてきていた。楊梅皮は『和漢三才図会（寺島良安著 1712年）』に「楊梅皮散 打ち身を治す。楊梅皮一味を用いて、細末とし、染家の用いる糊をもってこれを練る。曰く効有り。……」と記されている。犬山椒は、水戸の徳川光圀の編纂した『救民妙薬』の「諸腫物薬（もろもろのはれものやく）」の項に「犬山椒の実、青き時に、すりつぶして付けるか、葉を陰干にして粉にして酢にとき引き伸ばしても良い。ちらし薬なり。」とある。黄檗は、清熱薬で冷やす薬として単独で、時には山梔子と配合されて古くから湿布薬として使われてきた。